

一 次の文章は、筆者が、中高生に向けて勉強することの意味を説いた文章の一部です。この部分の前では、勉強には楽しくないと思える面もあることが述べられています。よく読んで、後の問いに答えなさい。

あなたに「勉強は楽しいのだから、するべきだ」と言う人がいたら、その人が勉強の何をもって楽しいとしているのか、ちよつと注意してみてもらいたい。その人は勉強するとき、あなたのように試行錯誤を重ねているだろうか？ できることばかりを満足げに数えるのではなく、できないことのほうへ向かっているだろうか？ ときに自分の愚かさやうんざりし、日々の短さにため息をついているだろうか？ もしそうでないのなら、その人が勉強を楽しんでいるように見え、そしてそれに比べてあなたは楽しめていないように思えるとしても、あなたが気にすることは何もない。①その人が楽しい程度にしか勉強をしていないだけだと思っておけばいい。

ここで誤解のないように④イチオウ言っておくと、「だから、あなたは苦しむべきだ！」と言いたいわけではない。少数とはいえ、試行錯誤すること自体が楽しくて仕方ないような、一種のマゾヒスティックな天才もいるものかもしれない。それに、うんざりしながら勉強しているわたしのような凡人であつても、「理解した」瞬間には喜びがあるものだ。だから、②「苦しくなければ勉強とは言えない！」という反対方向に極端な意見もまた間違っている。どうかそれは「楽しくなければ勉強とは言えない！」の亜種にすぎず、どっちみち正しい意味を持たない。

(A) 言いたいのはこういうことだ。勉強が楽しくないことは、あなたが勉強ができていない理由にも、ましてあなたが勉強をしなくていい理由にもならない。かといつて特別価値も持たない、ふつうの、よくあることだ。

そして何より、あなたの「楽しくなさ」こそが、あなたが勉強をする理由にもなるはずだ。「勉強をするべきなのは、勉強が楽しいからだ」というせりふを⑤マに受けるのだとしたら、先に挙げたような少数の「天才」だけが勉強をしていけばいいことになってしまう。元から能力に差があるのは、なんだか不平等だと感じるだろうか。けれど、自分が「天才」でないことを理由にあなたが勉強をしなくなってしまうのなら、それはそのままあなたが不平等を支持することになってしまう。

(B) 「天才」という言葉がなんだかあやしい、と思ったのなら、あなたはするどい。仮に、生まれつき何かの能力を持っている人のことを「天才」と呼ぶのなら、それはいわゆる「頭のよさ」だけの問題ではない。生まれた地域や、貧富や、周りにいる人たちの性質によつて、わたしたちは大きな影響を受ける。だから天才なんていない、と言うこともできるかもしれない。しかし同時に、そういう広い意味での「生まれ持ったもの」の差は、確かにある。「勉強を楽しめる」という能力にもまた、そういう外側の要素が大きく影響する。

そしてわたしは、「生まれ持ったもの」の多い人たちがだけが勉強をし、そうでない人たちは「楽しくないなら、しなくてもいい」とみなされて、勉強をしないままにいる世界を、あまりいい世界だとは思わない。勉強することはあなたが自由になるための力をつけていくことにつながる。既にある不平等を呑み込まれないようにするために、あなたは勉強をしないとけない。「勉強が楽しくないとしても」ではない。③「勉強が楽しくないからこそ」、そのあなたが勉強をすることに価値があるのだ。

ひとりで学びはじめるあなたには、つまり、これからきつと何度もうんざりするであろうあなたには、そのことを覚えておいてもらいたい。もう一度言っておこう。勉強が楽しくないことは、あなたが勉強ができていない理由にも、ましてあなたが勉強をしなくていい理由にもならない。これから勉強をするかぎり、自分の「できなさ」を睨みつけ、つぎつぎに振り切つていかないとけないあなただ。(C) 自分の「楽しくなさ」とは、なんとか連れ添つていくのがいいだろう。そして、同じようにひとりでうんざりしながら勉強しているわたしたちのような凡人がいることを、ときどき思い出してもらえるとうれしい。

最後に◎ヨダンとして、ちよつとだけ大人たちの肩を持つておこう。「楽しいから」とあなたに勉強を勧める大人たちは、(D) あな

たを都合よくごまかしたいだけではない。かといつて何か生まれ持っただけの「天才」でも、単に試行錯誤をさぼっているだけでもない。十分に苦しんだうえで、しかし本心から勉強が楽しいと言っている大人も、ときにはいるのだ。

正直に言うと、その気持ちかわからないわけではない。おおむね勉強が苦しいわたしのような凡人であつても、だ。けれどそれはなんというのか、「楽しいから、勉強しよう！」と勧めるには、ちよつと頼りない。苦しいこと、うんざりすることが山ほどあつて、その中に時たま楽しい瞬間が、それも⑥キセツに訪れる、という程度のことにはすぎない。あまりにささやかで、どこか暗い楽しみなのだ。◎ジユウでいえば完全に赤字だ。

けれど、その効率の悪い喜びに惹きつけられ、中毒のように苦しみながら勉強をする大人たちがいることも事実だ。そして、もしそのためにあなたが勉強をしたいというのなら、そしてそれに付随するたくさんさんの苦しみをも引き受けてくれるというのなら、④きつと大喜びであなたを歓迎するだろう。

(向坂くじら 柳原浩紀「群れから逸れて生きるための自学自習法」による)

※(注) マゾヒスティック：自分で自分を苦しめることを楽しむさま。
亜種：同じようなこと。

問一 (A) (D) に入る言葉として最もふさわしいものを次のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上使用しないこと。

ア 必ずしも イ まさか ウ そもそも エ せめて
オ ともかく カ たとえば

問二 ①とありますが、「楽しい程度にしか勉強をしていない」ことの具体例として最もふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 苦手科目であつても、自分なりに工夫を重ねて成果を上げていくこと。
イ 苦手科目はさておき、得意科目をひたすら集中して勉強していくこと。
ウ 学びたい内容が多く時間が足りないけれど、できる範囲で取り組むこと。
エ 一度間違えた問題を復習して、次のテストで完璧に解けるようになること。

オ 授業で解いた問題について、視点を変えることで別の解き方を思いつくこと。

問三 ②で「『苦しくなければ勉強とは言えない！』」とありますが、この「意見」が「間違っている」のはなぜですか。理由を説明しなさい。

問四 ③とありますが、このように言えるのはなぜですか。理由を説明しなさい。

問五 ④とありますが、なぜ「勉強を勧める大人たち」は「大喜びで」「歓迎」してくれるのですか。筆者が考える「勉強」とはどのようなものかを明らかにして理由を説明しなさい。

問六 ⑤⑥のカタカナを漢字に直しなさい。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

中学三年生の「僕」(蔵木幸也)は同級生の卒業アルバムに個人写真を撮影していた。ある日「僕」は「プロレスのマスク」をかぶって自分の写真を撮りたいというクラスメイトの星野誠二と口論になる。次の日「僕」は風邪で学校を欠席した星野君の家にいき、「お母さん」と話をするようになった。

お母さんは微笑み、少しだけためらったような間の後、
「私はね、小さな字は読めないし、写真も、かなり大きくないと判別がつかないのよ」
と、切り出した。

「あの子のお兄ちゃんの紋一こういちのときにね、卒業アルバムを見せてくれたんだけど、どれが紋一か、わからなかったの。情けないでしょう」

「そんなことは」

「誠二、どうも①それがこたえたみたいなのよねえ」

同じ場所、同じ画角、表情や服装も、みんな同じ写真。

極端に視力が低い人が、あの中からたった一人を探し出すのは、

②至難の〇〇だろう。

あ、そうか。だから星野君は……。

——パッと見ただけですぐに、こいつが星野誠二だ！ ってわかるようなやつ。

——ババーンって、目立つようにさ。

「そうか」

プロレスのマスクをかぶれば、たしかに、ぼやけた視界でも目立つだろう。これならすぐにお母さんにわかつてもらえるって、そう思ったんだ。バカみたいだけど、星野君らしいなと思う。

「そういうことか……」

星野君が僕に事情を話せなかったわけが、ようやくわかった。

——蔵木がいい人とか悪い人とか、そういうレベルの話じゃないの。

——生まれつき高いところに立ってる人の視界には、映らないものがあるんだよ。

あのとき、君島さんが言ったことが、急に③〇〇に迫せまってくる。
僕は写真が好きだ。写真とカメラに囲まれて育ったし、実際写真がうまいし、将来はカメラマンになる。そのために努力を重ねてきた。

写真を撮るのが好きだ。写真の可能性信じている。でも、僕がこんな風に写真を楽しめるのは、視力に問題がないからだ。
「見る」ことができるから。

それができない人も、いる。

「ごめんなさい。僕、今までずっと、知らなくて……」

「ええっ、なんでクラギ君が謝あやまるの」

すぐ隣にいたのに。何も気づけなかった。

星野君がどういう気持ちで、自由な撮影を提案したのか。

どんな思いを抱かかえて、撮影に付き合ってくれていたのか。

④見えていないのは、僕の方じゃないか……。

「お母さんの、その、視力は、よくはないんですか」

「ならないわねえ。むしろ悪化していく。そのうち完全に失明するんじゃないかな」

お母さんは机の上で手のひらを重ねた。

「悲しいわねえ、子どもの顔を見られなくなるのは」

「……」

目が見えない人の暮らしを、僕は知らない。そもそも僕は、今日初めてこの人と会ったのだ。全くの他人みたいなものだ。だから、この人が抱える悲しみを、今この場で理解することはできないし、理解すべきでもない。だけど、想像することはできる。星野君とお母さんの日々を。想像することはできる。一人でなんでもやろうとするお母さんと、それを心配する星野君。気を遣われなくなて、クラスの誰にもこの話はしない。だから、誰とも仲良くするけれど、誰とも深い仲にはならない。写真館で家族写真を見て、いいなと思うけれど、お母さんには言えない。写真なんて目が見えるやつの特権だろうって思っているけれど、絶対に僕には言わない。

③今僕は、星野君のレンズで世界を見ている。

その日の晩。

※クラギ写真館の待合のソファで、僕はパパにこれまでのことを話した。考えがまとまらなくて、話があっちゃこっちゃしたけど、パパは辛抱強く聞いてくれた。

「そうか。それは大変だったなあ」

話が終わった後、パパはソファの背に身を預けた。

「星野君の言う通りだ。僕、写真のことばかりで、自分勝手だった」

「それでもないと思うけどな」
「え？」

パパは眼鏡の奥の目をキュッと細めた。

「だって、お前が写真を撮るのは、人に喜んでもらうためだろう？」

そう……だったのか？

でもたしかに。

苦労の末に撮れた会心の一枚で、モデルに「ありがとう」って言われたとき……僕は嬉うれしかった。

うまい写真が撮れたとか、僕の⑤〇〇が認められたから、ではなくて。僕の写真で誰かが喜んでくれたということが、嬉しかったのだ。

そうか。僕は人を喜ばせたかったのか。

(中略)

「幸也。いい写真を撮ろうと思ったら、いろいろなことを勉強しなきゃいけない」

「うん」

「今お前は、とても大事なことを勉強している最中なんだと思うよ」

僕は待合をぐるりと見回し、パパの撮った家族写真の数々を眺めた。

いい写真だな、と思う。

パパがよく言うセリフ。④「うまい写真」と「いい写真」は違うんだって。

僕は思うのだ。たぶん、どれだけいい機材を使っても、どれだけ構図やライティングが上手でも、それだけじゃ「いい写真」とは言えない。

その人そのものが伝わってくるような写真でなければ。

だからパパはいつも、お客さんのどうでもいい長話や無茶な要望にも付き合うのだ。ただ機械的にシャッターを切るのではなくて。

パパの撮った写真を見てみると、撮影風景までも思い浮かんでくるようだ。

きつとお客さんたちは、この写真を見ながら思い出話をするだろう。あのときこんなことがあったねって。あんな話をしたねって……。

「そうか」

やっとわかった。写真の本質って、それ自体ではなくて。

ここから始まるストーリー。ここから始まる会話。

この写真を見ながら、過去を思い出したり、未来を語ったりすること。きつと、その体験まるごとをして、写真と呼ぶのだ。

だから写真って大切なんだ。この一枚は平面だけど、語る物語には奥行きがある。

星野君の言葉を借りるなら、写真は「物語を残す」のだ。

パパはたぶん、そういうことを伝えたかったのだ。

⑤……でも、だとしたら。

「やっぱり僕は、星野君を撮りたいよ」

星野君の物語を残したい。それで星野君に喜んでもらいたい。

「星野君に事情があるのはわかった。それでも……」

パパはカウンターに肘をつき、前のめりになった。僕を真正面から見据えて、言う。

「幸也、味方になるっていうのはね、ただ優しい言葉をかけてあげるんじゃないんだよ。一緒に悩んで、一緒に重荷を背負うってこと。簡単にできることじゃない」

「うん」

今ならわかる。 (天川栄人『ぼくたちの卒業写真』による)

※(注) 君島さん…「僕」の同級生。

クラギ写真館…「僕」の家であり、父が経営している写真館。

ライティング…写真を撮るとき光の当て方。

問一 ——— ④⑤の〇一つにひらがな一字を入れて、それぞれの表現を完成させなさい。ただし、⑥と⑦には体の一部を指す言葉が入ります。

問二 ——— ①で「それ」とありますが、どのようなことを指しますか。答えなさい。

問三 ——— ②とありますが、「僕」のどのような気持ちが表れていますか。説明しなさい。

問四 ——— ③とありますが、どういうことですか。説明しなさい。

問五 ——— ④とありますが、「うまい写真」と「いい写真」とは、どのように違いますか。説明しなさい。

問六 ——— ⑤とありますが、「僕」のどのような思いがあらわれていますか。説明しなさい。

一

問一

A
B
C
D

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

a
b
c
d
e

二

問一

a
b
c

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

検査番号

--